

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第卷一十五第

月九年五十和昭

## 論叢

ミスとリスト……………經濟學博士 堀 經 夫

經濟變動と財政……………經濟學博士 沙 見 三 郎

## 時論

經濟に於ける統制と體制……………文學博士 高 田 保 馬

## 研究

元史食貨志に見はれたる貨幣思想……………經濟學士 穗 積 文 雄

統制組織と問屋金融……………經濟學士 山 杉 競

原始教團の共同性……………經濟學士 澤 崎 堅 造

## 說苑

橋本左内の經濟思想……………經濟學博士 本 庄 榮 治 郎

滿洲大豆の發展……………經濟學士 江 頭 恒 治

## 附錄

彙報

外國雜誌論題

# 原始教團の共同性

——特にエルサレムに於ける所有について——

澤 崎 堅 造

## 一 問題・資料

紀元一世紀の半頃にパレスチナのエルサレムに於て、基督の弟子達を中心にして信徒等が極めて緊密なる共同生活を營んだと云ふことは有名である。嘗てカウツキーが「基督教の起源」<sup>1)</sup>に於て、それは全く共產状態であつたと云ふことからして、讀否の兩論が喧しく行はれたが、今日に於ても未だ一般的にはカウツキーの考への印象の方が強く残つてゐるやうである。こゝに此の問題に觸れようとするのは、必しも新しい資料や見解を示さうとするのではないが、この様な經濟的な共產状態を現出するためには、その底に或る種特別の緊密な生活状態があつたこと、更にそれを導いた特別な精神状態があつたことを明かにして見たい。勿論、一定の經濟現象や社會状態を生むものは、必しもかゝる精神状態にのみ根據を置くことは出来ない。外的・物質的な、歴史的・社會的な諸條件を考察しなければならぬ。併しこゝには問題の述べ方を前者の場合に限らうと思ふ。蓋し、かゝる基督教の起源に關する特別な状態に關しては、極めて主要なる動機または條件として、精神的なるものが如何に一定の生活状態を生み出したか、またそこに於て特殊なる經濟状態を現出したかを考察することが重要だと思ふ。

- 1) Karl Kautsky, *Der Ursprung des Christentums*, Berlin u. Stottgart, 1923, S. 347 f. 近藤宗男氏譯、四四九頁以下。
- 2) R. B. Backham, 1930 (*Westminster Commentary*), XXVII-XXXVI. cf. A. Harnack, *The Date of the Acts and of the Synoptic Gospels*, E. T., N. Y., 1911.

併しまづかゝる状態が歴史的に事實であつたかどうか、その資料は如何と云ふことが問題となる。この事柄が明に記載されてゐるのは、新約聖書の使徒行傳第二章と第四章の終りの部分である。

「斯てペテロの言を聽納れし者はバプテスマを受く。この日、弟子に加はりたる者、おほよそ三千人なり。彼らは使徒たちの教を受け、交際をなし、パンをさき祈禱をなすことを只管つとむ。こゝに人みな畏を生じ、多くの不思議と徴とは使徒たちに由りて行はれたり。信じたる者はみな偕に居りて諸般の物を共にし、資産と所有とを賣り各人の用に從ひて分け與へ、日々心を一つにして弛みなく宮に居り、家にてパンをさき、歡喜と真心とをもて食事をなし、神を讚美して一般の民に悦ばる。斯て主は救はるゝ者を日々かれらの中に加へ給へり」(二・四一—四七)

「信じたる者の群は、おなじ心おなじ思となり、誰一人その所有を己が物と謂はず、凡ての物を共にせり。斯て使徒たちは大なる能力もて主イエスの復活の證をなし、みな大なる恩恵を蒙りたり。彼らの中には一人の乏しき者もなかりき。これ地所あるひは家屋を有てる者、これを賣り、その賣りたる物の價を持ち來りて使徒たちの足下に置きしを、各人その用に隨ひて分け與へられたればなり」(四・三二—三七)

併しこの記事については、まづその筆記者が誰れであるかを問はねばならない。それは多くの學者の研究によつて、共觀福音書ルカ傳の記者で、パウロの同伴者であつたルカが大體を書いたものとされる。<sup>2)</sup>けれども使徒行傳の前半、殊に第二章や第四章の如きは、彼が當時残つてゐたところのエルサレムに關する傳承を資料として書いたものとされる。<sup>3)</sup>そしてなほその兩者が可成り重複してゐるとも見られる。<sup>4)</sup>この記事の内容は大體紀元三〇年前後であるが、ルカが書いたのは六〇年から八〇年頃までの中とされてゐる。<sup>5)</sup>またこのルカ自身がこの状態を経験したのではなく、殊に彼はエルサレムの人でもなく、パウロについて異邦教會の立場に多く立つたのであるから、<sup>6)</sup>更に彼は文章家であつたから時に潤飾をしなかつたとは云はれない、<sup>7)</sup>等々の理由を擧げることによつて、右の資料を大分割引して考へられる部分もある。<sup>8)</sup>けれども逆にまたルカは自ら醫者として、事實について正確に

- 3) A. Harnack, the Acts of the Apostles, E. T., 1909, p. 166. cf. J. H. Ropes, the Apostolic Age, 1912, p. 75.
- 4) E. F. Scott, the Beginings of the Church, N. Y., 1914, p. 143.
- 5) Harnack, op. cit. p. 297. Backham, p. 1f. etc.
- 6) F. Jackson & K. Lake, the Beginings of Christianity, I, London, 1920, p. 300.

見る力を持つてゐたであらうし、比較的公平な判断を持ち、社會的正義については少からぬ關心を持つてゐたと云ふこと、<sup>9)</sup> 更には彼はパウロやエルサレムのシラスと共働し、羅馬に於てはエルサレム生れのマルコと共にあつたし、主の兄弟ヤコブと個人的な親しさを持ち、彼自らもパレスチナに行つたこともあるから、この地方の社會状態をよく知つてゐたと思はれる。<sup>10)</sup> 殊に彼がこの傳承を記述したのは三、四十年の隔りを以てゝある。故に非常なる間違ひまたは架空な空想を畫くことは當時として許されなかつた筈である。

たゞ併し、そのエルサレムに於ける原始教團の生活振りが共産的なものであつたかどうかについては、細目については問題があるが、その大體の目的については肯定するものである。<sup>11)</sup>

## 二 エルサレム教團の成立

原始教團を廣く見れば、イエスとその弟子及びこれに附隨した一團から初めねばならぬかも知れないが、普通はイエスの死後、その弟子達を中心とする信徒の一團がエルサレムを中心にして在つた所謂エルサレム教團とアントオゲその他の異邦教會又はパウロによる異邦人教會をも含めて云はれるのであるが、こゝには主としてその初め、且つ中心であつたところのエルサレムに於ける教團を指すこととする。<sup>1)</sup>

彼らの構成は初めは大體、十二使徒即ちイエスの直弟子十一人と後に選ばれたるマツチャヤを中心置き、それにイエスの兄弟ヤコブ、母マリア、その他の婦人等が加つたのである。その數凡そ百二十名。ペテロとヨハネとヤコブの三人がその中で最も重んぜられ、彼らの「柱<sup>2)</sup>」と稱された。その中でもペテロは特に尊ばれた。それ

7) Scott, p. 138.

8) 資料としてやゝ不正確なりとするものに例之、F. C. Baur, Paul the Apostle of Jesus Christ, I, E. T., 1876, pp. 6.

9) Scott, p. 138.

10) Harnack, Acts, p. 164.

11) やゝ肯定するものに、Jackson etc., p. 306; Scott, p. 143 の外に E. Dobschütz,

はイエスによつて「我この磐の上に我が教會を建てん」<sup>3)</sup>と云はれたからである。が、後にはヤコブが代つた。この様な家族的一團はエルサレムに於て、聖靈の導きを受けつゝ極めて親しき且つ熱烈なる信仰生活を共に營んでゐた、が併し次第にその數は増し加へられ、遂には數千を以て數へられるに至つた。<sup>4)</sup>その國別も色々であつて、パレスチナ以外に小亞細亞、希臘、羅馬、阿弗利加、アラビア等の生れのユダヤ人並に、異邦人改宗者等が加つた。<sup>5)</sup>彼れらの多くは巡禮者であつたらうから、いつまでもエルサレムに留つたとは思はれないが、併しそのうちには暫く留るものもあつたであらう。とに角、かかる異邦生れのユダヤ人も多くエルサレム教團に加はる様になつた。いはゆる「ギリシヤ語のユダヤ人」も多く加つたが、そこに自ら従來の「ヘブル語のユダヤ人」と幾分微妙なる關係に立つ様になつたから、そこにいはゆる「執事」といふものも出來、説教も堂々で行はれるやうになつた。<sup>6)</sup>遂にはその一人なるステパノは最初の殉教を遂げるといふことになつた。「無學の凡人」<sup>7)</sup>なるガリラヤの漁夫ペテロは今や全教團の父として、或は説教し、或は奇蹟を行つた。預言者ヨエルの云ふ様に「末の世に至りて、我が靈を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、なんぢらの老人は夢を見るべし。その世に至りて、わが僕・婢女にわが靈を注がん。彼らは歡喜すべし」<sup>8)</sup>と云ふ状態であつた。

かゝる急速なる教團の發展は一體如何なるところに原因があるのであらうか。この問題については、所謂原始教團成立の動因として、種々に論議されるのであるが、これを大きく分ければ大體二つになる。一つは外的・間接的動因と他は内的・直接的動因とである。前者については、或はユダヤ教に起源するものとし、そのメシア思想、その敬虔、その禁欲等に置く。殊にはパリサイ派或ひはエッセネ派の影響が著しいとか、又は洗禮者ヨハネ

Christian Life in the Primitive Church, E. T., N. Y., 1904, p. 143. A. C. McGiffert, A History of Christianity in the Apostolic Age, Edinburgh, 1928

(4), p. 67. etc. 1) Harnack, Acts, p. 264. 2) ガラテヤ書 2:9.

3) マタイ傳 16:18. 4) 使徒行傳 2:41, 4:4. 5) 同上: 2:9-11.

6) 同上 6:1-15. 7) 同上 4:13. 8) ヨエル書 2:28, 28.

によるとか、なほ廣く東方密儀教やギリシヤの神祕主義によるとか、埃及の風潮に染つてゐるとか、更には羅馬文化の影響等をも數へることが出来る。けれども、これらは何れも原始教團の發生に影響を與へたものであつても、未だ何れも本源的なものではない。何が基督教の本質或は特質をなしたかと云ふことを指示しなければならぬ。そこで次に内的な直接的な動因を、その主たるものについて擧げるならば、何よりも先づその主たるものは福音であらう。

(イ)福音——とは何か。それは彼らの師にして主たるイエスがキリストであつたといふこと、いまなほ生きて我々に働きかけ給ふと云ふことである。十字架にかけられたイエスが救済主であるといふこと、即ち我らの罪を贖ひ、復活して永生を與へ給ふことである。救済と永生とは、從來のユダヤ教によれば律法の準守によらなければならなかつたが、イエスはいと弱きもの、いと小さきもの、いと貧しき者のために、また傲れるもの敵するものためにさへ、身を以てその罪を贖ひ給ふたといふことである。嘉き福音である。故に罪を悔ひて福音を信ずるものには神の國が約束せられるのである。かくてイエスは地上的なメシアではなくて神の國のキリストである。かくて神は、從來ユダヤ教に於て義の面をのみ現はしたものが、こゝに愛の面を遺憾なく現はした。神は愛なり、これがイエス基督に於て具現された。明々白々なる事實として人間イエスに於て、歴史的啓示として現はれた。これを見ることによつてのみ神を見る事が出来る。復活の基督は聖靈となつて世々に生くる。そしてまた救済の成就のために、再び來るといふことを待望する。かゝる状態に人々をしてあらしめたが故に、或は一面終末的な色彩が現はれたけれども、併しそこには未だ決して暗いものが迫つてゐるのではなくして、明るい準備の

- 9) Karl Hall, *Urchristentum und Religionsgeschichte*, G. A. K., II, 1928, S. 9 f. 佐藤繁彦博士譯 一八頁。  
10) Hall, *op. cit.* 邦譯 一八頁以下。  
11) J. Weiss, *The History of Primitive Christianity*, E. T., I, 1937, p. 50.  
H. Lietzmann, *The Beginnings of the Christian Church*, E. T., I, 1937, pp.

新生活態度が生れたのである。福音は、人をして神に對しては敬虔、他に對しては兄弟の愛に導くものであつた。かくて福音の中にこそ、原始教團發生の主たる動因を認めることが出来る。或人は神觀に、<sup>10)</sup> 神の國に、<sup>11)</sup> 或人はメシア思想を、<sup>12)</sup> 主の思想を、<sup>13)</sup> 或人は終末思想を、<sup>14)</sup> 基督の人格を、<sup>15)</sup> 家族的兄弟の愛、<sup>17)</sup> 英雄崇拜を等々色々あるが、その大體は右の福音の中に含まれると思ふ。更にあるものは、教團の貧しさを云ふ。物質的な貧弱さ、貧窮の人々の階級憎惡と云ふものに動機を置く。<sup>19)</sup> それは確に一面の事實を執へたものである。現にイエスの弟子達を見て、漁夫や税吏や婢女等、世に卑しめられた者が多い。病弱者が多い。エルサレムの教團を見ても、ペテロを初めその多くの者はガリラヤから遙々來つた者である。多年イエスに従つて諸國を流浪したものである。家を離れ、職業を捨て、財産を賣つたものが多いのである。<sup>20)</sup> 尤も中には少しく富者もあつたが、異邦から集つたヘレニストも随分貧しい者が多かつた様だ。更になほ後にエルサレム教團は諸異邦教會の助けによること多かつたと云ふことは、色々なそれから後の事情にもよることであらうけれども、とに角に初めから比較的貧しい人によつて集られたと見ることが出来る。けれどもそれらの人は決して此の世を冷視し、職業を蔑視し、富者を呪つたとのみ考へることは到底出来ない。たゞ問題は、確に教團の人は貧しい人が多かつたといふこと、<sup>21)</sup> それが却つて彼らの心を貧しくして、福音を容るに適しい器となしてゐたと云ふことが出来る。従つて彼れらは貧しきが故に却つて積極的に新生活に力強く歩むことが出来たのである。<sup>22)</sup>

たゞも一つ重要な動因として特に擧げることが出来るのは、(ロ)靈の働き——と云ふことである。<sup>23)</sup> これも勿論また右の福音といふ中に當然含まれてゐるのであるが、原始教團の成立に於て特に著しいものとして擧げなければ

77. E. Troeltsch, The Social Teaching of the Christian Churches, E. T., 1931, I, p. 70. etc.

12) Harnack, The Expansion of Christianity in the First Three Centuries, E. T., II, p. 2. Troeltsch, p. 70. McGiffert, p. 50 の外に Lietzmann, p. 90. etc.

13) W. Bousset, Kyrios Christos, Göttingen, 1921 (2). 14) McGiffert, p. 67.

ばならないものである。靈または靈の働きが極めて重要視されたことは、當時の一般状況であつた。従つて自らユダヤ教にしても基督教にしてもその成立や發展に際してこれが少からざる本源的な影響を與へたものであることがわかる。當時に於ては、靈は實在であつた。偉大なる働きをなすものであつた。イエスの時代にパレスチナの社會に如何に多く行はれてゐたかは福音書の示す通りである。従つてまた弟子達に於て、殊に原始教團の成立に於て非常に顯著なものであつたことは明かである。

そしてその第一は基督の復活である。基督が十字架にかゝつて死したけれども後復活して、まづガリラヤに於けるペテロを初め弟子達に現はれ、その後多くの人に現はれ、彼らを勵まし彼らを結束せしめたことは、力強い弟子達を何よりも力付けたことである。復活のイエス、これは全く靈の實在を信じなければ見得ないことであつた。そして基督はエルサレムに於て昇天した。これまた靈に於て信ぜらるべきことであつた。そして彼等弟子達は、基督の言葉を守つてエルサレムに留つた。こゝに原始教團の成立の基礎がある。<sup>24)</sup> 第二は、所謂聖靈降臨である。イエス昇天後五旬節の日に、エルサレムに於て弟子達が集つてゐたとき、「烈しき風の吹ききたるごとき響」<sup>25)</sup>「火の如きもの舌のやうに現はれ」<sup>26)</sup>「彼らみな聖靈にて滿され、御靈の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ」。そこに集つた諸邦の民は、人種も生國も言葉も違ふけれども、それが一つ聖靈に燃やされた。そこに於て驚くべき精神の高揚が起り、ペテロの薦めによつて遂にその日弟子に加つたもの「おほよそ三千人」<sup>27)</sup>とある。こゝに於て原始教團の最初の飛躍が行はれたことは明かである。この様な聖靈の降臨は併し屢々あるべきものではなく、歴史上まれなるものである。

15) R. J. Knowling, *The Expositor's Greek Testament, Acts*, London, 1901, p. 101.  
16) McGiffert, p. 66.  
17) Troeltsch, p. 70; McGiffert, p. 67 f.; Dobschütz, p. 144; J. Calvin, *Commentary*, E. T., I, p. 130 の外、M. Baumgarten, *Acts of the Apostles*, E. T., I, 1854, p. 78; O. Pfleiderer, *Primitive Christianity*, E. T., 1906, p. 32;

要するに、原始教團の成立の最大動因は、福音である。こゝに於てメシヤも神の國も終末も、貧者の多きことも、兄弟愛もすべて含まれてゐる。そしてこの働きを促進するに最も大きな内面的力となつたものは靈の働き、殊に基督の聖靈によることである。こゝに於て復活の基督と聖靈の降臨が含まれてゐる。更にこの福音と聖靈の働きによつて、教團には新しき目標と新しき生活態度とを持つた。そこに史上まれなる眞の共同體生活の在り様が示された。

### 三 エルサレム教團の生活

かくの如くして成立した原始教團は、如何なる具體的生活を爲したか。それについて先づ彼らが、(イ)「洗禮を受けた」(Baptizhany)<sup>1)</sup>と云ふことから述べねばならない。洗禮は既にヨハネの教團に於ても行はれたことは、イエスがこれを受けたことでも明かであるが、このエルサレム教團のは單なる悔改めの洗禮ではなく、新しく神の國へ入れられる證しであり、それをイエス基督の名に於て行ふ聖靈の洗禮と云ふところに區別があつた。<sup>2)</sup>彼ら一つ御靈、即ち基督の聖靈を受けると云ふところに重要性があつた。「日々心を一つにして弛みなく宮に居り」<sup>3)</sup>また「信じたる者の群は、おなじ心おなじ思となつ」<sup>4)</sup>たと云ふごとくである。

次に彼らの生活について證されるところによると、(ロ)「使徒たちの教へを受けた」(Prisokrasenovanie ty dnyty<sup>5)</sup> apostolov)。その教の内容は、集團の根本義即ち主イエス基督の死とその復活、贖罪と永生、神の國と敬虔、ユダヤの律法、傳承、教訓等であつたらう。<sup>6)</sup>これを教ふる「使徒」(apostolov)と云ふのは、主としてイエスの

G. T. Purves, Christianity in the Apostolic Age, N. Y. 1910, p. 37 参照。  
 18) P. Wernle, The Beginings of Christianity, E. T. 1903, I, p. 127.  
 19) K. Kautzky, S. 343 f. 邦譯 四四三頁以下。  
 20) C. Weitzsäcker, The Apostolic Age of the Christian Church, E. T. I. 1894  
 p. 54. 21) Lietzmann, p. 78. 22) Weitzsäcker, p. 54. 23) 例

直弟子を意味した。彼らは「ヨハネの弟子」と云ふ如くに「イエスの弟子」(μαθηταὶ τοῦ Ἰησοῦ)とも云はれたらしく、また「聖徒」(ἅγιοι)とも「師」(ἐπιστολάρι)とも稱された。of μαθηταὶ と云つて十二使徒を指す場合もあるが、後には μαθητρία と云つて基督者一般を指す様になつた<sup>10)</sup>。彼らの教團は初めから教へるとか教へを受けるとかは重要なこととなつてゐた。初めイエスをば弟子たちが「ラビ」(ραββί)と稱んでゐたが、イエスを基督としてメシアとして仰ぐに至つてもなほかゝる慣習は残つてゐた様である。一般からも學徒または教師として寫つてゐた様である。

(註) μαθηταὶ と云ふ言葉は長く續いて用ひられたとは思はず、大體二世紀までと云はれる。パウロでさへこれを獨立に用ひたことはなく、「主の」(τοῦ κυρίου)を附して使徒を意味した。尤も時には紀元六八年に迫害を受けてエルサレムからペテラに逃れた人々を指すこともあるが、また使徒行傳の記者ルカによつて後に用ひられたものがあるが、それは單なる擬古文に過ぎない<sup>12)</sup>。この外なほ「基督者」(Χριστιανοί)とも一般から稱されたが、併しそれは主として異邦アンテオケ教會に於て反對者側から付けられた呼稱である。初めに於てはパウロも、エルサレムに於ても、信者自らこれを云つたのではない。

次に、聖書には「交際をなし」(ἐπισημαίνοντες)とあるが、それは次の「パンをさき」と「祈禱をなす」と同格をなすと見てそれらの概括をまづ示したものとすることが出来る。(尤もこれには資料的に反對するものもあるが<sup>17)</sup>)

(註) Κοινωνία は元來物資的社會を指し、外的・具體的な生活態を意味するのであつたが、後には精神的意思も加つたことは、例へばアリストテレスの倫理學に云ふところを見てもわかる<sup>18)</sup>。が、聖書に於て示すところはもつと深い關係を示す。それは一つの生ける全體に參與する状態であつて、物の分與・分有、共有や友情、交誼、施與の團體以上に家族<sup>20)</sup>の如き有權的共同體を意味する。従つてこの Κοινωνία を形成するものは相互に「主の兄弟」(ἀδελφοὶ τοῦ κυρίου)であつて、「友人」(φίλοι)ではなかつた<sup>21)</sup>。

この共同體生活の中心となすものは、「パン」(ἄρτος)をさきと「祈禱」(προσευχὴ)である。これはたゞ食事を

2) Jackson & Lake, p. 305 f. 24) Ropes, p. 67. Wernle, p. 117.  
 Lietzmann, p. 76. 25) 使徒行傳 2:2, 4. 26) 同上 2:41.  
 1) 同上, E. Nestle, Novum Testamentum, Stuttgart, 1935, S. 303.  
 2) Lietzmann, p. 81. 3) 使徒行傳 2:46. 4) 同 4:32.  
 5) 同 2:42. Nestle, ibid. 6) Harnack, Acts, p. 269. Backham, p. 33.

共にすると云ふ外觀に過ぎないが、併しそれには極めて深い意味が加へられた。尤も共同に食事を執るといふことは元來ユダヤその他に於て廣く行はれたが、(例へば金曜日の夕の *sabbath meal*)。パンをさく、と云ふ表現はなかつた。<sup>23)</sup> 教團の人達は、普通のユダヤ人の如く、神殿にも詣で、會堂にも参つたのであるが、その中の選ばれたる者等は同信の或る家に於て、または家々に自ら集つて夕食を共にするのであつたが、そこには先づ何よりも主基督の記憶と臨在とがまさまざとあつた。<sup>24)</sup> 樂しさと希望と相互の愛が満ち充ちた。<sup>25)</sup> 彼らは祈り且つパンをさいた。主の最後の晚餐を思ひ新たにした。彼らは主の一つ身體を分け採るとの實感に迫られた。そして此の共餐には、貧しき兄弟を潤はうすと云ふ意味が自ら含まれた。こゝに愛餐 (*agape*)<sup>26)</sup> と稱される所以がある。けれども亦彼にはパウロによつて著しく信仰的に解釋され、パンをさくとは全く主イエスの肉を喰ふことであり、併せてその血をのむことでもある。こゝに主の死と生命とが色濃く取扱はれ、次第に儀式的に重んぜられるに至つた。<sup>27)</sup> これを「聖餐」(*eucharistia*)と後に稱ぶ様になつた。この聖餐の意味が既にこの原始教團の共同食事、「パンをさく」ことの中に幾分かは窺はれるとする。<sup>28)</sup>

更に次には、(ニ)「祈禱をなすこと」(*itis proseuaitis*)<sup>29)</sup> があつた。祈禱は主として、毎日の定め如く神殿に登つて獻げたのであるが、その外にもなほ「會堂」<sup>(註一)</sup> や「教會」<sup>(註二)</sup> に於て、「主の祈り」<sup>(註三)</sup> をなし、自由に個人の祈りをもなしたのであらう。<sup>30)</sup>

(註一) 基督教團は初めは殆んど全くユダヤ教の中に在つて成長したと言ふことが出来る。彼らはユダヤ人として新しき一派をなしたものに考へまた取扱はれたやうである。元來ユダヤに於ては、十人集ればいつでも一つの會堂 (*synagogue*) を作るこ

7) cf. マタイ傳 27:57. 但しこゝでは「弟子とした」であるが、その他「彼の」又は「主の」弟子と云つた場合は極めて多い。  
 8) Weitzsäcker, p. 43. Harnack, Expansion, II, p. 8 f.  
 9) Harnack, *ibid.* これはルカ傳に限る。  
 10) Harnack, *op. cit.* p. 2 f.  
 11) マタイ傳 23:7, 8. ヨハネ傳 1:49:3:2. 12) Harnack, *ibid.* f. n. 2.

許され、各自の意見と習慣とを持つことが出来た。(勿論イスラエルの教會と國民の範圍に於て。)そこでラビの傳承によれば當時エルサレムのユダヤ人會堂は四百八十を數へたと云ふのであるから、ペテロを初めとする原始教團の人々が初めは別に疑はれなかつたわけである。

(註二)「教會」を意味する *ekklesia* は元來希臘に於ける都市國家の自由民による議會の如きものであつた。<sup>33)</sup>一定目的のために常時開かれる市民議會ではあるが、エペソに於ける如く劇場で行はれることもあつた。併し聖書に於ては多く極めて宗教的な意味に用ひられた。パウロがガラテア書に於て「ユダヤの諸教會」(*ταῖς ἐκκλησίαις τῆς Ἰουδαίας*)<sup>34)</sup>と稱んだことからして、既に早くからエルサレムの近傍に於ては基督者の會堂が、*synagoga* とは區別して *ekklesia* としてあつたことがわかる。またパウロによれば、基督者の會堂をば「神の教會」(*ἐκκλησία τοῦ θεοῦ*)<sup>35)</sup>と云ふ風に云つたのである。よし「神の」と云ふ言葉がない時でも在るものとして意味されたのである。そしてパウロによれば多くは地方的な小さい家の教會を指し、天的・超越的なそして聖にして公けなる眞のイスラエルを意味した。<sup>37)</sup>

尤も *ekklesia* そのものはユダヤに於ても相當古くから用ひられたのであつて、舊約聖書七十人譯に於ても、世俗的な集團としてヘブル語で *edah* と云ふのに對して *synagoga* とし、神聖なる神に對する集團 (*Qahal*) に對して *ekklesia* と譯してゐる。そして後者の使用はヤ、遅れてゐると云はれるが、要するに埃及邊りに於ても既に紀元前二、三世紀に聖會を意味するものとして *ekklesia* を用ひてゐたことがわかる。これが後に偶然にも基督者の會堂を特に名付ける様になつたわけである。

(註三)「主の祈り」は、イエスによつて弟子達に示されたものであるが、その原形は今日わからないが、なほ傳承されてゐるものと似たものであらう。天にいます我らの父よ、願はくは御名の崇められんことを。御國の來らんことを。御意の天のごとく、地にも行はれんことを。我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。我らを試に過せず、惡より救ひ出たまへ。<sup>38)</sup>こゝに於てよくその教團の本質、使命、生活が如實に示されてゐると思ふ。

なほこれらのことの外に(ニ)施濟と(ホ)財産の共有とがあるが、これらは相互に關連し且つ重要なことからであるので次に更めて述べることにする。

13) 使徒行傳 11:26; ペテロ前 4:16. 14) 使徒行傳 2:42. Nestle, *ibid.*  
15) T. Zahn, *Die Apostelgeschichte des Lucas*, 1922, S. 134.  
16) Weitzsäcker, p. 45. 17) Knowing, p. 94.  
18) Nic. *Ethica*, VIII, 9, 12. Bekker, 1159b, 1162a; 高田三郎氏譯 四二-一頁、四三五頁。 19) J. H. Thayer, *Grimm's Greek English Lexicon*, N. Y., p. 352.

## 四 エルサレム教團の所有

原始教團の中、特にエルサレム教團の人々が貧しかつたと云ふことは事實である。彼らは「貧しき人々」<sup>1)</sup>とさへ稱された。「日々の施濟」<sup>2)</sup>をさへ支給されねばならぬものが多かつた。そこで態々そのために救貧掛として執事を選ばねばならなかつた。エルサレム教會へ獻金を賣すと云ふことは當時可成り重要な事であつた。パウロがこのため少からざる勞苦をしたことは明かである。時にはエルサレム教團の後の指導者ヤコブが、次の様な叫びを擧げてゐることも事實である――

「聽け富める者よ、なんぢらの上に來らんとする艱難のために泣きさけべ。汝らの財は朽ち、汝らの衣は蟲ばみ、汝らの金銀は錆びたり。この錆、なんぢらに對して證をなし、かつ火のごとく汝らの肉を蝕ばん。汝等この末の世に在りてなほ財を蓄へたり。視よ、汝等がその畑を刈り入れたる勞働人に拂はざりし値は叫び、その刈りし者の呼聲は萬軍の主の耳に入れり。汝らは地にて奢り、樂しみ、居らるゝ日に在りて尙おのが心を飽せり、汝らは正しき者を罪に定め、且つこれを殺せり、彼らは汝らに抵抗することなし、兄弟よ、主の來り給ふまで耐忍べ」<sup>3)</sup>

と。かくの如き貧困に墜入つたのは何故であるか。この問題については從來色々に述べられてゐる。パレスチナの土地が自然的に瘠せ、天災、饑饉が續いたこと、かくて産業的に見て貧弱であつたこと<sup>4)</sup>、或は政治的、文化的に著しく外國の支配下にあつたこと、國內の秕政・内亂相次ぎ、租税の誅求も苛酷であつたこと、更には宗教的に祭司の權力徒らに強く律法主義にして眞の生命力を缺いてゐたことも數へ擧げられる。が併しこれらのものは一般にさうなのであつて必しもエルサレム教團の人々に限らない。そこで特にその教團が貧しかつたと云ふことについては、まづ前述した如く福音といふものが本來「貧しきもの」に於て受け納れられるといふことが擧げら

20) cf. H. Alford, Greek Test. II, London, 1857, p. 26. Baumgarten, p. 77.  
 21) Harnack, Expansion, p. 25 ff. 22) 使徒行傳 2:42, Nestle, op. cit.  
 23) Weiss, p. 57. 24) cf. Lietzmann, p. 79. 25) Weitzsäcker, p. 53. etc.  
 26) ヌタ書 12. Nestle, S. 611. 27) コリント前書 11:23—35.  
 28) 原始教團の共餐に愛餐のみならず聖餐を入れることの可否につき從來大いに

れよう。勿論これは心の貧しさではあるが、併し實際には物質的な貧しさ、地位の低さ、身體の弱さ等云ふものが、福音を受けるに適しい器なのである。イエス自ら大工の子として、馬小屋の馬槽の中に生れたと云ふことは大きな啓示である。従つてイエスの弟子はペテロを初め多く漁夫とか卑しき税吏とか、殆んど名も無き民の群であつた。山上の垂訓<sup>9)</sup>はかゝる者にこそ受け容れられた。けれどもなほ彼らが愈々貧しかつたのは、その弟子となつては、財を捨て、業を離れ、家を去つて異邦に流浪つたことにも原因があらう。迫害を受けたことも一再に留らない<sup>10)</sup>。彼らに終末觀が強かつたため、現世のものに冷淡となつたと云ふことも、全くないと云ふことは出来ない。が要するに、彼らの貧困の原因は主として福音そのものにより、それに多くの直接・間接の原因が附加したのと思ふ。が特に注意して置かなければならないのは、その貧しさが却つて生命の活氣に力付けたと云ふ點である。宗教的運動は常に殆んど經濟的貧困さの中に却つて生命あらしめられると云ふことを知らなければならぬ。かゝる貧しさが、併し極めて生命に充ちた集團には、自らに一つの偉大なる現象を現はした。それは財産の共有と貧者への施濟・分與とである。使徒行傳第二章の示すところによると、信じたる者はみな偕に居りて「諸般の物を共にし」(ἐξῆν ἅπαντα κοινά)とある。諸般の物とは、生活萬般のもの盡くといふ意味ではなく、共同生活に差し當つて必要なもの、生活の維持に根柢的に必要なものである。「共にし」と云ふ言葉こそコイノニアの具體的な働きである。また第四章によると、「誰一人、その所有を己が物と謂はず」(οὐδὲ εἷς ἐξ ἑαυτοῦ ἔσχεν τι ἰδίον ἀλλὰ ἅπαντα κοινά)とあるからには、從來自己の持つてゐたものを總べて自己の私有物とは思はなくなり、主キリストに於て、總べてのものであつたと云ふことが意識せられる。「資産と所有とを賣つ」(ἔλαβον πάντα καὶ ἠγάπησαν αὐτῷ)に於て、總べてのものであつたと云ふことが意識せられる。「資産と所有とを賣つ」(ἔλαβον πάντα καὶ ἠγάπησαν αὐτῷ)

議論あり、例へば Calvin (p. 132) は最も反對であるが Bengel, Gnomon, 1877, II, p. 538 の如きはその中間を執る。Alford, 1857, II. p. 26. や Meyer, 1879, I, p. 96 に於ては餘程聖餐の意味を入れようとする。

29) 使徒行傳 2: 42. Nestle, op. cit. 30) Weiss, p. 55. 31) Jackson & Lake, p. 304. 32) Weiss, p. 56. 33) 山谷省吾博士「新譯と解釋」I (1) 三〇頁。Scott, p. 31.

eritrazarou)<sup>10)</sup>た。それを屢々行つた。それは更に「地所あるひは家屋」(χορηγών τῶν οἰκιῶν)<sup>11)</sup>であつたといふから、動産も不動産も指したのである。賣つたとあるからには何れ賣買の行爲も市場も當然これを認めたのである。そして「その賣りたる物の價を持ち來りて」(καταβύρας ἐσθραυ τὰς τιμὰς τῶν πικρατοκενῶν)<sup>12)</sup>とあるから、その價を貨幣化してゐたことがわかる。それを「使徒たちの足下に置き」<sup>13)</sup>その管理の下に共同の財産とした。そしてその使用については、「各人の用に從ひて分け與へられた」(ἐκάστην καθὼς ἤν τῆς χρείας αὐτοῦ)<sup>14)</sup>とある。即ち平等な分配ではない。それは必要に應じて、量的に質的に分けられたのである。これを受けるものは大體貧しきものではあるが、必ずしもそれに限るわけではなく、凡そ必要なものは誰れでもであらう。また「分け與へた」とは、共有財産の利子や剩餘を與へたのではなく、財産自體を分與したことである。かくの如くして實に教團には「一人の乏しき者もなかりき」<sup>15)</sup>とあるが、併しこの一人もと云ふのは、丁度第二章の人みなと同じくやゝ誇張した理想に對する言葉であるか、または一定範囲内でのみ、なと云ふ意味なのであらう。

かゝる共有・分與の状態が原始教團に於て實際に行はれたであらうかについては、少くとも初め暫くは聖靈の導き、兄弟愛の意識極めて強い、比較的小さい家族的團體の内は大體行はれたであらうが併し、聖書に於てなほ右の記事の後に引き續いてバルナバが、自己の畑を賣つてその金を使徒に持つて來たと云ふ記事と、アナニアとサツピラが共に資産を賣つてその價の幾分を匿し、詐つて全部を使徒に獻げたとした記事<sup>16)</sup>が書いてあるのは、何かその前の記事と矛盾するやうであるが、併しそれ程矛盾してゐないものとしても、確に財産を提供すると云ふことは特異なる、記憶すべき事柄であつたことは事實である。併しそれにも不拘、やはり相當なる共有財産を以

24) 使徒行傳 19:29, 39. 35) ガラテヤ書 1:22. Nestle, S. 480. 36) Weitzsäcker, p. 48. Harnack, Expansion, p. 11. 37) cf. Harnack, op. cit. p. 13.  
 28) マタイ傳 6:9—13. ルカ傳 11:2—4 參照。なほ「國と權力と榮とは限りなく汝のものなればなり」は聖書にはない。 1) ロマ 15:26, ガラテヤ 2:10.  
 2) 使徒行傳 6:1. 3) ヤコブ書 5:1—7. 4) 例之、山谷博士、ロマ書、三四八頁。

て多くの人に分與し得たことは明かである。

これを要するに、原始教團の所謂共有状態と云ふものは、全くその教會的・共同體の必然の現はれに過ぎないが、特に注意すべき點は、まづ第一には強制によつて行はれず、自發的であること、第二に恒常的でなく、特殊・臨時的であること、第三に賣買や市場や貨幣を認めなかったこと、第四に共有財産は使徒が管理したとは云へ、一應神に獻げられたるものであること、第五に共有財産を以て生産的に活用し、その利潤や利子を分配するのではなく、財産自體を分與したこと、第六に分配の目的は使徒達の手によつて主として施濟のために用ひられたこと、第七に分配は等しき分配ではなく、必要に応じてある。

併し、なほこの共有状態に當時のエッセネ派の影響があらうと云ふ説には聞くべき點もあるが、それも要するに、規制的でなく自發的であること、義を得る手段として禁慾をなすのではないこと、感謝と奉仕の獻金であること、管理者が選任されるのでなく、初めから使徒であつたこと、使徒は常に一定の統制の權威を持つたこと等を擧げることによつて、その明かな相異を見るし、當時弟子團に於てはエッセネ派を直接に知るよしは無かつたとも云はれてゐる。

## 五 結

エルサレム教團に於て財産の共有と分與とが行はれたといふことは事實であるが、その内容を少しく見れば、所謂共產状態とは、その動機に於て、その方法に於て、またその目的に於て著しく異つたものがあることは既に

5) マタイ 5: 20 以下。 6) 山谷博士、同上。 7) McGiffert, p. 65.  
8) 使徒行傳 2: 44. Nestle, S. 303. 9) 使徒行傳 4: 32. Nestle, S. 309.  
10) 同上 2: 45. Nestle, S. 304. 11) 同上 4: 34. Nestle, S. 309. 12) 同上。  
13) 同上 4: 35. 14) 同上 4: 35; 2: 45. 15) 同上 4: 34.  
16) 同上 4: 36, 37. 17) 同上 5: 1-11. 18) cf. McGiffert, p. 67.

述べた如くである。この團體がかゝる状態を執り得たことは、全くその團體の特殊的なる構成による。即ち福音が心貧しき者に眞に受け容れられたこと、それが更に聖靈によつて生かしめられ、一つ主に關與する兄弟としての相互の間柄に於て初めてかゝる特異なる共有・分與の状態が生れたのである。少くともその中心の重要な動機はそれである。それを抜いては、この結果は生じなかつた。かゝる特異なる状態は、かゝる特異なる經驗によつて起り得る。従つて爾後これを理想として屢々類似のものが試みられたが、何れも長く眞の成功をしたものはない。否、エルサレム教團自體でさへ、成立僅か數年にして所謂「ギリシヤ語のユダヤ人」(ヘレニスト)が、その派の寡婦達が日々の施濟に洩らされるを不平したために、新しく七人の執事をこれがために任命したといふことが起つた。こゝに内部的動搖が兆し初めたのである。従來の「ヘブル語のユダヤ人」とは決してさまでの對立は示さなかつたかも知れないが、常に必しも完全な一致を示したとは云へない。それはパウロの書翰に現はれた爾餘の諸教會のその後の状態に於ても常に示された所であるが、たゞそれらを常に支へたものは福音と聖靈の働きである。然るにエルサレム教團が、やゝに律法化し制度化するに及んで、その生命力は枯渴し、紀元六八年の大迫害を逃れてペラ地方に去つてから、この教團の跡はわからなくなつた。これ要するに、この教團の成立が著しく宗教的な動機に出でたと云ふことが、その共同性を極めて緊密なるものとならしめ、そこに於て僅かに暫く特殊なる共有・分與の状態を現出せしめたが、數年にして動搖し、四十年にしてその跡を絶つに至つたと云ふことは、取りも直さずその宗教的動機に依つて終始した點が大きいと云ふことが出来ると思ふ。(一五・五・一)

- 19) cf. Weiss, p. 71. 然るに用ひられたる動詞がアオリストであるからやゝ繼續的に行はれたものとする者、例之、Purves, p. 37. 20) Calvin, p. 193.  
 21) Jackson & Lake, p. 306. 22) Weitzsäcker, p. 57; Knowling, p. 101; Weiss, p. 72. 23) McGiffert, p. 67 f. n. 2. J. & L., p. 306. cf. Purves, p. 37.  
 24) Weiss, p. s, p. 69. 25) Weitzsäcker, p. 57 f. 26) Weiss 71 f.  
 27) op. cit., p. 72. 28) *ibid.*